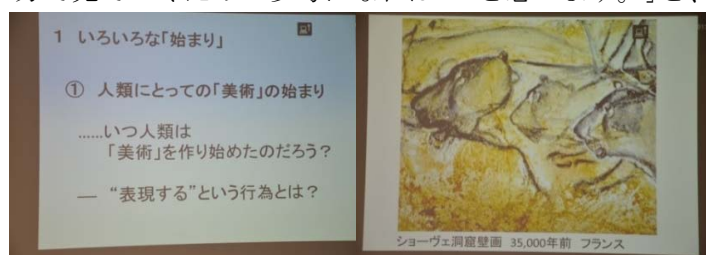


平成 27 年度第 8 回文系チャレンジ講座を実施しました

平成 27 年度第 8 回文系チャレンジ講座が、平成 28 年 2 月 20 日、「「美術」の始まり」をテーマに、本学教育福科学部の田中修二先生によって行われました。

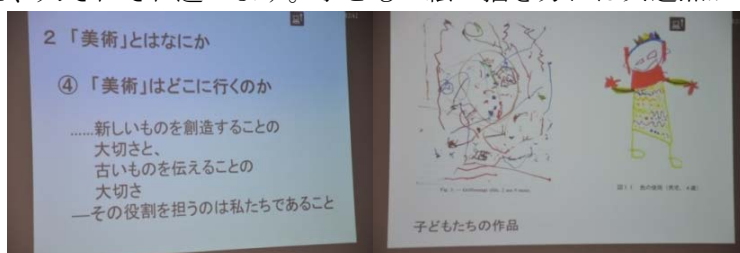
遠隔配信された大分^{おぎのだい}雄城台・大分鶴崎・大分商業・日田・^{あじむ}安心院・別府青山 翔青・国東・高田・大分西・三重総合・臼杵の 11 校の各高校から 159 名の高校生が受講しました。

はじめに、田中先生は「物事には何にでも始まりがあって、それは「美術」でも同じです。いつ「美術」が始まったのかということを考えると、見方によっていろいろな「始まり」が見えてきます。この講義ではそれらのいろいろな「始まり」を、具体的な「作品」を例にあげながら見ていくことで、私たちにとって「美術」とは何なのか——なぜ「美術」があるのか、人の役に立つのかなどについて考えてみましょう。皆さんが「美術」に限らず、いろいろな物事についていろいろな見方で見ていくための参考になれば・・・と思います。」と、受講生に語りかけました。



どのような目的で描いたのか。当時の人々は、美術の概念は持ち得ていなかったもので、当然美術ではなかったはずです。稚拙に見える洞窟画の構図や色彩を考えると、現代人は美術としての価値を見いだすのでしょうか。

一人の人間にとっての美術の始まりを考えてみると、人それぞれ違います。子どもの絵の描き方には共通点があります。最初は線で描き、そして徐々に形のあるものを描くように変化していきます。このように人間の知能の発達過程に描き出されるものについても私たちは美術として評価するのでしょうか。



日本において、概念として「美術」が生まれたのは、明治 5 年頃です。鎖国が終わり、西洋の文化が一挙に日本に入ってきた時代です。「美術」とそうでないものの境界線を考えるのは大変難しいことです。新しいものを勉強することによって今まで見てきたものが、まったく違うように見えてくることがあります。縄文時代の土器なども、「美術」として考えるようになっていきます。時代によって、美術作品の評価が変わっていく可能性があります。美術には新しいものを創造することの大切さと古いものを伝えることの大切さがあります。その役割を担うのは私たち自身です。

講座後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(97%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(95%)、「授業量は適切であった」(97%)、「わかりやすかった」(96%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(97%)、という評価がでました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(77%)、「映像はよく見えた」(90%)という結果がでました。受講生の具体的な声として「「美術とは何か」など、考えたことがなかったが、見方を変えることの素晴らしさと難しさを感じた」、「人間が創造してきたものが、歴史の中で「美術」、芸術作品と捉えられる変化の過程に興味を感じた」、「「美術」って、



まだよくわからないが、いいなあと思った」、「ラスコーの壁画を描いた当時の人は、どんな考えで描いたのか、後世にこれだけ影響を与えるなんて、どのような人だったのか、会ってみたい」など多くの感想が寄せられ、大学での学びの広さを実感できた講座になったようです。